The Japan Society of Educational Sociology

第2回奨励賞を受賞して

奨励賞を受賞して

白松　賢

このたびは，日本教育社会学会第二回奨励賞に拙稿を選んで頂き，本当にありがとうございました。身に余るほどの光栄であり，たいへん恐縮している，というのが率直な感想です。論文の中にも記述しましたが，若者文化のフィールドワークに参入している過程で偶発的な出来事を契機に出発したものですので，あらためて拙稿を見直すと反省と課題ばかりが浮かびます。

ただ受賞の対象となりました拙稿が公刊に至るまでに，様々な方からの指導，助言，批判を得られたことやフィールドで協力してくれたインフォーマントの若者たちのお陰で，この賞を頂いたと，深く感謝しています。質的研究に不慣れながらも学会報告をさせて頂いた際に，学会員の先生方から示唆に富むご意見とご助言を頂いたことや質的調査の研究会に参加させて頂き，社会構築主義のアプローチを学ばせて頂いたこと等が，論文をまとめていく上で非常に参考になりました。また遅々として論文をまとめない私を叱咤激励して下さった広島大学の先生方には，深く感謝しております。

拙稿の問題関心は，「ドラッグ」を逸脱／社会問題カテゴリー化する公共の言説と「ドラッグ」ユーザーの相互作用における解釈活動との関わりを明らかにし，現在の薬物乱用防止教育や啓発活動の課題を見出すことでした。

これまでの薬物乱用防止教育や啓発活動は，「ドラッグ」ユーザーの無知を原因として設定し，没理性のレトリックで語っています。しかしながら，無知として没理性化され一元化されて語られる「ドラッグ」ユーザーの解釈活動はこれまでほとんど研究されていませんでした。その中，フィールドワークでユーザーらと出会い，「ドラッグ」をめぐる公共の文化（言説やその言語的資源によって構築されたイメージ）を用いて，マジックマッシュルームの安全性を表現するメンバーの〈語り〉に触れました。その〈語り〉から，公共の言説の中で無知という一つの物語に回収される「ドラッグ」ユーザーの生の多義性と多様性を回復し，因果論や対策論の前提を問い直す意義を描きたい，という想いが強くなりました。

そこで，物語枠組みを社会構築主義アプローチに，方法論をエマーソンらのエスノグラフィーに求めることで，両者の課題を相互補完し，教育臨床への方法的可能性を開きたい，と試みた成果を拙稿としてまとめさせて頂きました。社会構築主義アプローチをエスノグラフィーに

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

持ち込むことで，研究対象や知見の「個別性と全体性」を強調でき，社会構築主義アプローチにエスノグラフィーを持ち込むことで，日常的なトークや相互作用へ経験的研究を拡張することができるのではないか。さらに逸脱／社会問題の質的研究が少ない現状では，その研究を豊饒化し，教育臨床への方法的可能性を開けるのではないか。この単純な発想は，フィールドワークの過程で浮かんだものでした。

フィールドは，非常に多様な感情や想いの交差するアリーナであり，また私の想像以上に不確実性に富んだ場所であったため，様々な出会いの楽しさの一方で悩ましく苦しい作業でしたが，その苦労を乗り越える喜びを得た拙稿を表彰頂き，大変嬉しく思いますし，質的研究で苦労している方々への励みになればと願っております。改めて受賞に感謝すると共に，お世話になった方々へ心から感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

「ローカルとグローバルを結ぶ視座」

額賀美紗子

このたび奨励賞を頂いた拙稿は，私が修士課程在学中に日米の小学校で行ったフィールドワークに基づいて執筆したものである。あれから5年の歳月が流れ，この3年間は研究拠点をロサンゼルスに移して幾つかの公立小学校で調査を続けてきたが，どの現場でも周囲の方々のご協力なくしてフィールドワークは成立しないことを痛感している。5年前の調査で私の問題関心に沿うデータを多数収集できたのは，学校を斡旋してくださった東京大学の恒吉僚子先生とメリーランド大学のBarbara Finkelstein先生および同大学の国際教育政策センター所属スタッフの方々の親身なアドバイスとご協力に拠るところが大きい。あらためて感謝の意を表したい。また，お名前を出すことは控えるが，私の訪問を快く受け入れてくださった小学校の校長先生および先生方に深く感謝するとともに，執筆の過程でコメントを寄せてくださった方々やご審査くださった先生方にも，この場を借りて心からお礼申し上げたい。

拙稿を執筆した当時の私の原動力は，多文化教育という理念に対する熱い期待であり，同時にその実現可能性に対する懐疑であった。今論文を読み直してみると，期待の方が先走り，多文化教育を標榜する実践がはらむ，意図せざる不平等の再生産にまで踏み込んだ分析が足りなかったという反省が残る。一方で，教師が民族的マイノリティ生徒に対して行う様々な教育実践，そしてそれを可能にしたり拘束したりする社会的文脈を描きだすことには，ある程度成功したのではないかと思う。主張したかったことは，教師の視点や教育実践は社会的文脈に埋め込まれており，教師が教室でマイノリティ生徒をどう扱うか，またどう扱うことができるかという問題は，教師を取り巻く幾重の社会的文脈の理解なしには語ることができないという点である。とはいえ，紙幅の制約もあって，拙稿では教師の実践に最も直接的な影響を与えていたと思われる社会的文脈のひとつを挙げたにとどまり，幾層からも成る社会的文脈

NII-Electronic Library Service